

「オルワレを忘れない (Remember Oluwale)」

堅田 香緒里

法政大学

1969年4月、イングランド北部・ヨークシャー地方にあるリーズという都市で、ある一人のナイジェリア系イギリス人男性が亡くなった。溺死だった。二人の警察官から追われ、なんとか逃げ込んだエール川が彼の最後の場所となった。

デイヴィッド・オルワレは1930年、ナイジェリア最大の都市ラゴスで生まれ、19歳になる1949年の夏、貧しい故郷を離れイギリス行きを決行する。イギリスの植民地であったナイジェリアからは、当時多くの若者がオルワレと同様より良い未来を求めイギリスに渡っていた。オルワレは、貧しくて切符を買うこともできず、港町に届けられる落花生の箱の中に隠れてイギリス行きの貨物船に乗り込んだ。密航だ。しかし、船がイースト・ヨークシャーに到着するや否や密航者として刑務所に入れられてしまう。出所後のオルワレは、リーズという工業都市で、戦後のイギリス福祉国家の基盤を支える労働者の一人として生きることになる。

1953年、オルワレは警察との争いに巻き込まれ、暴行罪で起訴され刑務所に戻されてしまうことになる。しかしこのとき警察官に頭を殴られた後遺症で、その後長い間幻覚に悩まされることになる。のちに彼は統合失調症と診断され、リーズ郊外の保護施設に送られ、その後8年間をそこで過ごすことになる。施設では電気ショック療法と重い抗精神病薬を投与され、退院後は仕事もできず、亡くなるまでの最後の2年間、リーズの中心部で野宿をしながら生活していた。その間彼はずっと、二人の警察官から日常的に身体的、精神的虐待を受けていたとされる。

オルワレの死から50年以上が経過した2022年春、彼が最後に目撃された場所に近いリーズ橋に設置されたオルワレのブルー・プラークの除幕式が行われた。ブルー・プラークとはイギリス国内各地に設置されている青色の史跡案内板のことで、歴史的な出来事や著名な人物に所縁のある場所に設置されることが一般的である。その意味で、オルワレのブルー・プラーク設置は、彼の死、そして彼がここに生きていたことを忘れない、歴史に刻むという画期的な意味を持つものであったと言える。ちょうどサバティカルでリーズに滞在していた筆者は、この歴史的な除幕式に参加することができた。除幕式では、彼のブルー・プラーク設置に向けて势力的に活動してきたリメンバー・オルワレやリーズ・シビック・トラストのメンバー、オルワレに関するエッセイを執筆した作家のカリル・フィリップスによるスピーチの他、歌のパフォーマンスも披露された。その場で共有されたチャントの一つをここでシェアしたい。

「エール川は冷たく深い。オルワレ。リーズ警察を信用するな。オルワレ。」

(The River Aire is chilly and deep, Ol-u-wale; Never trust the Leeds police, Ol-u-wale)"

明るい未来を夢見てイギリスに渡ったオルワレは、そこで精神疾患を患い、仕事も住まいも失い、日常的な人種差別を生き、ほとんど常に警察の暴力に晒されていた。そして、39歳の若さで殺された。彼の死は、黒人死亡事件への関与でイギリス警察が初めて起訴されるきっかけとなった¹。その裁判の過程で明らかになったのは、オルワレへの日常的な虐待に関与していた二人の警察官の動機は、「単に彼にこの街にいてほしくなかったから」であったということだ。この言葉が思い出させるのは、2020年11月、渋谷区のバス停で寝泊まりしていたところ、地域住民の男性に殴り殺された野宿女性のことである。彼の犯行動機は、彼女に街から「いなくなってもらおうこと」だった。こうした言葉が象徴しているのは、「異物」を取り除こうとする社会の欲望である。

イギリス福祉国家の基盤を支えた労働者の一人・デイヴィッド・オルワレの死は、人種や貧困、精神疾患等をめぐる様々な差別が交差する地点で、警察権力によってもたらされた。リーズでは、ブルー・プラークの設置を通して、これらの差別や「異物」を取り除こうとする社会の欲望と徹底的に闘い続ける意志を市民たちがはっきりと示すことになった。しかし実は残念なことに、ブルー・プラーク設置の除幕式から数時間後、当該のプラークが何者かによって取り外され／盗まれてしまうという事件が起きた。この出来事は、オルワレが生きた時代から50年たっても変わらぬ差別に根差したヘイトクライムの存在を象徴している。それでも、リーズの市民は諦めない。即座に、市民らの手によってブルー・プラーク型の青いステッカーが作られ、市内の各所に貼られることになった。

約50年前に起きた（そして現在にも続く）ヘイトクライム、そうした歴史を直視するリーズ市民たちの行動は、日本で福祉を学び研究する私たちにどのようなことを問いかけているだろうか。共に考えたい。

参考

デイヴィッド・オルワレと彼の死に関して関心のある方は、以下のウェブサイト「Remember Oluwale」を参照されたい。

<https://www.rememberoluwale.org/>（最終閲覧日：2022年10月28日）



除幕式の様子



市民が作成したブルー・プラークのステッカー

¹ 2名の警察官は過失致死罪で無罪となったものの、陪審員によって一連の暴行の罪で収監されることになった。